

(5) 4つの手立ての妥当性と課題についてのまとめ

ア 手立て①

授業実践を行うまで、児童生徒が教師に与えられた一律の教材、指導方法で学習を進め、中には学習に取り組まない児童生徒も見られたが、手立て①を講じたことで、児童生徒が自分の得意な学び方を見付けることができていた。結果、学習材・学習時間・学習方法を選びながら、課題解決に近づくようになった。よって、手立て①は妥当性が示されたと考える。

一方で、児童生徒の興味・関心、特性、学習到達度に合わせた学習材・学習時間・学習方法等を柔軟に設定するだけでは、児童生徒が自分に合った学び方を選択できないことがあった。そこで、学習材を用いる基準を示すことや、教師が児童生徒の学習の様子を見取り、必要に応じて個別に指導したり、一斉に指導したりする場面を設けることが必要である。

イ 手立て②

授業実践を行うまで、教師や周りの指示をただ待つだけで、自分から学習内容や学習方法を考えようとする児童生徒が多く見られたが、手立て②を講じたことで、児童生徒が自分のできたことやできなかったことを整理したり、自分に合った学び方に気付いたりした。結果、児童生徒が自分の学びを調整しながら学習を進める姿が見られた。よって、手立て②は妥当性が示されたと考える。

一方で、学習材・学習時間・学習方法や自身の学習到達度を振り返る場面を設けるだけでは、自分の学習到達度を客観的に捉えることが難しい場合、学習を調整することに繋がらないことがあった。そこで、教師が児童生徒一人一人の振り返りの内容や学習状況を把握し、振り返りの目的を児童生徒と共有したり、振り返りに記入する内容の具体を提示したりして、児童生徒が自身の学習を分析し、より効果的な学習方法を見つけられるよう支援を講じる必要がある。

ウ 手立て③

授業実践を行うまで、他者の意見や考えに無関心で、一人で学習を進める児童生徒が見られたが、手立て③を講じたことで、児童生徒が一人では課題を解決できず、他者の意見や考えを知りたいと感じるようになった。結果、児童生徒が他者を参照したり、お互いに助言し合ったり、合意形成を図ったりすることで新たな視点を得たり、考えを深めたりする姿が見られた。よって、手立て③は妥当性が示されたと考える。

一方で、難易度の高い課題を設定することについて、児童生徒の交流が感想の伝え合いで終わってしまう場合、児童生徒の関わり合いの中で考えが深まらないことがあった。そこで、児童生徒の思考を見取り、必要に応じて思考ツールを用いさせたり、一斉指導を行うなどし、考えを整理したり、深めたりしていく必要がある。

エ 手立て④

授業実践を行うまで、課題解決に必要な情報を誰に聞けばよいか分からないまま一人で、学習を進める児童生徒が見られたが、手立て④を講じたことで、児童生徒が課題解決に向けて、誰に相談したり、誰と学習を進めたりすればよいか、把握することができていた。結果、適切な相手と協働することができていた。よって、手立て④は妥当性が示されたと考える。

一方で、同じ課題や学習材に取り組んでいる他者が分かるようにしたが、手立て④の活用方法を理解していない児童生徒の場合、誰に相談したり、誰と学習を進めたりすればよいか把握できないことがある。そこで、教師が必要に応じて協働相手を提案したり、助言をしたりする必要がある。

VI 本研究のまとめ

1 本研究の成果

(1) 手立ての焦点化

本研究では文献や先行研究を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」

の一体的な充実を図るための手立てについて、4つに焦点化を行うことができた。

(2) 焦点化した手立てについての妥当性と課題の検証

本研究では焦点化した4つの手立ての妥当性と課題を、授業実践を通して考察した。このことにより、4つの手立ての妥当性を示すとともに、課題を整理し、今後改善に向けた視点を示すことができた。

2 今後の展望

(1) 4つの手立ての課題に基づく授業実践

各教科の授業実践では、焦点化した手立てについてそれぞれ課題が見られた。焦点化した手立ての改善を図った上で、今後は、更なる授業実践を重ねていくことが必要と考える。

(2) 研究結果の他教科や他校種への展開

本研究は小学校算数科、小学校体育科、中学校社会科、中学校外国語科を対象に行ったが、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実は、教科や校種によって限定されるものではない。そのため、それぞれの教科や学校の特性に合わせた実践研究を行い、より多くの児童生徒に質の高い学習機会を提供することが望まれる。

(3) 焦点化した4つの手立てと資質・能力の関係性

本研究では、子供の学びの姿をもとに焦点化した4つの手立てへの妥当性と課題を考察したが、焦点化した4つの手立てと資質・能力の関係性について、考察することができていない。焦点化した4つの手立てを講じたことで、児童生徒の資質・能力にどのような変容が見られたかを考察していくことが望まれる。

参考・引用文献

- 1) 中央教育審議会「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現』2021年、p. 1
- 2) 前掲書 1)、p. 2
- 3) 前掲書 1)、p. 18
- 4) 荒瀬克己「子供を主語にした学校教育へ」『〈個別最適な学び〉と〈協働的な学び〉の一体的な充実を目指して』北大路書房、2023年、p. v
- 5) 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（中央教育審議会 第一次答申）」1996年、https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701h.htm、(参照2023-8-29)
- 6) 前掲書 1)、p. 17
- 7) 前掲書 1)、p. 17
- 8) 加藤幸次『個別最適な学び・協働的な学びの考え方・進め方』黎明書房、2022年、p. 2
- 9) 石井英真「『個別最適な学び』と『協働的な学び』を生かす評価」2023年、<https://shop.gyosei.jp/library/archives/cat03/0000017663/>、(参照2023-8-29)
- 10) 堀田龍也「GIGAスクール構想と目指す学び」、2023年、<https://www.mext.go.jp/studxstyle/special/44.html>、(参照2023-8-29)
- 11) 山本朋弘「『自立した学習者の育成』～Vol. 1 自立した学習者とは～」2023年、<https://service.ricoh.co.jp/education/articles/00038.html>、(参照2023-8-29)
- 12) 前掲書 8)、p. 2
- 13) 前掲書 9)、(参照2023-8-29)
- 14) 前掲書 10)、(参照2023-8-29)
- 15) 前掲書 11)、(参照2023-8-29)
- 16) 前掲書 1)、p. 18
- 17) 堀田龍也「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」『内外教育』時事通信社、2023年、7069(4-4)、pp. 10-11
- 18) 竹西亜古「クラスのフェアな決め方ルールを作ろう」<https://ksm.hyogo-u.ac.jp/934/>、(参照2023-8-29)
- 19) 前掲書 1)、p. 18
- 20) 澤井陽介「特集 『令和』の日本型学校教育に向けた協働的な学びこれまでと何が同じで何が異なるか」2021年、<https://shop.gyosei.jp/library/archives/cat03/0000013683/2/>、(参照2023-8-29)
- 21) 伏木久始「互恵的に深化・発展する個別最適な学びと協働的な学び」『〈個別最適な学び〉と〈協働的な学び〉の一体的な充実を目指して』北大路書房、2023年、p. 99
- 22) 前掲書 1)、p. 19
- 23) 奈須正裕『個別最適な学びと協働的な学び』東洋館出版社、2021年、pp. 165-170
- 24) 奈須正裕『個別最適な学びの足場を組む』教育開発研究所、2022年、pp. 70-71
- 25) 二宮裕之「算数科における「個別最適な学び」と「協働的な学び」の互恵的・補完的關係の捉

- え方』『新しい算数研究』2022年、621(10)、
pp. 4-7
- 26) 前掲書 24)、pp. 185-186
- 27) Cronbach, L. J. :1957「The two disciplines of scientific psychology」『American Psychologist』1957年、12(11)、pp. 671-684
- 28) 長澤悟「子供の学びを支える教育環境の在り方」『初等教育資料』東洋館出版社、2023年、1031(3)、p. 2-5
- 29) 前掲書 21)、pp. 91-92
- 30) ダグラス・マグレガー、高橋達男(訳)『新版 企業の人間的側面：統合と自己統制による経営』産業能率大学出版部、1970年
- 31) B. J. ジーマーマン・D. H. シャンク(編)、塚野州一・伊藤崇達(監訳)『自己調整学習ハンドブック』北大路書房、2014年、p. 26
- 32) デイル・H. シャンク、バリー・J. ジーマーマン(編)、塚野州一(編訳)、伊藤崇達、中谷素之、秋場大輔(訳)『自己調整学習の実践』、北大路書房、2007年、pp. 1-18
- 33) Winne, P. H. 「A metacognitive view of individual differences in self-regulated learning.」『Learning and Individual Differences』1996年、8(4)、327-353
- 34) 梶田叡一・静岡大学教育学部附属浜松中学校『自己学習能力の育成』明治図書、1984年、pp. 14-18
- 35) 奈須正裕「一体的な充実を実現する2つの在り方」『〈個別最適な学び〉と〈協働的な学び〉の一体的な充実を目指して』北大路書房、2023年、pp. 68-69
- 36) 佐藤学『学校を改革するー学びの共同体の構想と実践』岩波書店、2015年、pp. 96-103
- 37) 杉江修治『協働学習入門』ナカニシヤ出版、2011年、pp. 85-86
- 38) Bloom, B. s., Hastings, J. T. & Madaus, G. F. 『Handbook on formative and summative evaluation of student learning.』McGraw-Hill
- 39) 前掲書 37)、pp. 91-92
- 40) 高橋純『学び続ける力と問題解決ーシンキング・レンズ、シンキング・サイクル、そして探究へ』東洋館出版社、2022年、pp. 20-21
- 41) 前掲書 17)、pp. 11-12
- 42) 横山大河、松島充「個別最適な学びと協働的な学びの一体化を実現する学習モデルーICT活用による選択・共有を生かした授業の提案ー」『香川大学実践総合研究(47)』2023年、pp. 43-54